

く ま も と

367号

日本郵趣協会
熊本支部会報
2022.7

沖縄切手 1945~1972

坂本祥三

今年、5月15日で沖縄復帰50周年になります。1945年—1972年の間沖縄切手は、綺麗な図案の切手が、数多く発行され、日本国への沖縄本土復帰と共にその歴史の終りを迎えました。

沖縄切手通史

1945年(昭和20)3月26日沖縄本島西方の多良間列島に上陸して、沖縄戦が、始まった。戦闘は、80余日わたる両軍の死闘ののち、6月23日、日本軍が壊滅し終末をむかえた。

1948年(昭和21)1月29日「外邦地域分離覚書」によって、北緯30度以南の南西諸島の行政権も、日本から分離され、軍政府が、設立された。その後各地区に軍政府の民政府が、作られた。

1950年(昭和25)9月、民政府の代わるものとして、公選の群島知事を首長とする群島政府が、設置され、翌1951年(昭和26)4月、これら4つの群島政府の上に琉球中央臨時政府が作られた。1年後の1952年(昭和27)4月には、行政府、立法府。上訴裁判所の三権を持った琉球政府に改組された。この間の1950年に軍政府の名称が、民政府に変更された。

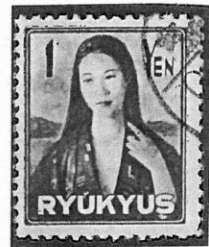
1952年2月11日北緯29度以北の島々が続いて1953年(昭和28)12月25日、北緯27度以北(奄美諸島)の参政権が、返還され(鹿児島県へ編入)、1972年(昭和47年)5月15日、復帰が実現した。この時復帰した区域が、現在の沖縄県である。

郵政史的に見れば、1949年(昭和24)8月の郵便料金統一がひとつの区切りになる。それ以前は各民政府ごとに料金が、異なっていた。料金の収納方法も、各地区で日本切手をそのまま使ったり、別納印で収納したり、認印押捺切手類(暫定切手)を発行したりと様々であった。

しかし、これでは、不便なことが多く、徐々に統一が、進められ、1947年(昭和22)5月の全琉球通信総会、1948年(昭和23)7月の正刷切手発行などを経て、1950年4月にまだ各民政府が存在していたときに、琉球郵政庁が設立される。

B 円軍票が沖縄の正式通貨になったのは、正刷切手の発行とほぼ同時期であった。通貨が、米ドルに変更された。1958年（昭和33）9月までの10年間に発行されたB円切手、その後、1972年5月15日の復帰までの13年余の間に発行されたのが、米ドル切手である。

これらの「琉球/RYUKYUS」と表示された切手は、本土とは、別に発行・使用され、日本の一地方の被占領地切手として、扱われる。



普通切手

B 円時期

1948 年 (昭和 23 年). 7.1 第 1 次普通切手. ・初版

- 1 5BS ソテツ
- 2 10BS テッポウユリ
- 3 20BS ソテツ
- 4 30BS 唐船
- 5 40BS テッポウユリ
- 6 50BS 唐船
- 7 1 YN 農夫

1946 年 7 月。沖縄地区での郵便料金の有料化に伴って郵便切手の必要性が、認められ、切手発行は発行が計画された。図案の作成が、占領軍から支持され、当時沖縄民政府通信部の職員だった比嘉秀太郎が原画を描いた。

初版切手は、製造数が、わずかなために発売は極めて制限され、内国郵便でその郵便を局の窓口に差し出した時だけ売られた。

正刷切手発行当時、郵政は、各民政府ごとに独立していたので、それぞれの民政府に配分され、これに伴い各民政府発行の暫定切手は廃止された。

1950 年 (昭和 25) 1.1. 第 2 次普通切手

- 8 50BS 瓦屋根
- 8A 50BS 瓦屋根 (純白紙)
- 9 1 BY 沖縄の少女
- 10 2 BY 首里城正殿
- 11 3 BY 龍頭
- 12 4BY 琉装の女
- 13 5 BY 貝殻

1952 年 (昭和 27) <<改訂>> 加刷切手

1950 年発行の第 2 次普通切手 #8 (50BS) に 10 円、#10 (2 BY) に 100 円の新額面により黒字加刷した。

10BY./50BS (52.1.1.)

日本・琉球間に航空小包の扱いが開始され、高額切手の不足が、予測されたが、正刷切手は、間に合わないので、加刷をしてしのぐことにした。加刷は、那覇以外の向春印刷所でも行われ、そのつど原版が作りかえられ、第 1 版、第 2 版、第 3 版が、存在する。

100BY/2 BY (52.6.16.)

1952 年 4 月 15 日以降、米国の軍人・軍属以外の外国人は、すべて琉球政府の

郵便機関を使用するように指令された。このため高額切手が必要になり、加刷切手が発行された。額面が高額であったことから、発売局も那覇中央郵局ほか7局にかぎられた。

1958年9月16日通貨切り替え

1958年8月23日沖縄で使われているB円を9月16日をもって米ドルに切り替えると命令が、発せられた。切り替えは、台風のために9月16日に延びたが、郵政当局は、米ドルを表示した数字図案の切手を急きょ印刷した。

44 1/2C

45 1C

46 2C

47 3C

48 4C

49 5C

50 10C

51 25C

52 25C (糊あり)

53 50C

54 50C (糊あり)

55 \$1



(参考文献；ビジュアル日本切手カタログ vol.2ふるさと・公園・沖縄切手編)
(使用切手 ; 郵趣サービス社より・沖縄使用済 257種+未使用 16種購入分)



5月15日、日本への復帰後沖縄切手は6月3日まで使用が可能であった。

1\$ = 305円換算、端数切捨てで1¢ = 3円のルートで計算された。

当時の封書料金は20円で、5¢分の沖縄切手と5円白鳥切手を貼付したラストディカバーを披露します。



正刷切手は、普通切手・記念特殊切手・航空切手・速達切手など郷土色豊かな図案や題材が数多くあり、259種が発行された。

中でも、改訂加刷100円切手が難関となることは、皆さんもご存知の通りです。航空切手の加刷が逆になった物や、19種が発行された「みほん」切手にも高額のものがあり、揃いで30万円ほどです。

手元に残った沖縄切手は5月15日から6月30日まで各郵便局にて交換が実施された。それ以後は、8月31日まで那覇・宮古・八重山郵便局にて、交換された。

1972年1月をもって通信販売が停止されたため、切手投資センターを中心とし切手投機があり、「守礼の門」切手が投機の象徴とされた。シートで30,000円ほどの値をつけた。